



「猫ちぐら」づくり

静かな農村の新潟県関川村に「猫ちぐら」づくりの名人・横山ノブさん（90歳）を訪ねると開口一番「60歳の時からねす、孫に手が掛らなくなったので始めたなす」と歯切れの良い方言が心地よく響く。ワラ仕事で一番大切なのは水を向けると「ワラの選別やワラ打ち、それと猫の出入り口を作るぐみ編みだすな」と語る。黙々と手編み仕事に精を出す姿は美しいの一語に尽きる。完成まで一週間を要するという。幼少時、学校の勉強は良くなかったが、ワラ仕事になじんでいたので「この年になって役立ったなす」と微笑む。今では村一番の名人と謳われ、生きる喜びが溢れている。「猫ちぐら」の由来は、昔、子供用として赤ちやんを入れ農作業を行った「つぐら」をヒントに考え出された。現在は猫のマイホームと親しまれ、珍重される伝統的民芸品として名を馳せ、全国から注文が相次いでいる。原料はワラのみだが、人間の手で編み出す温もりが何とも微笑ましいものである。

（写真・文 樋口健二）